

産業革命期経営史研究

大河内 暁男 著

岩 波 書 店

産業革命期経営史研究

一九七八年一〇月一三日 第一刷発行◎

定価三〇〇〇円

著者 大河内 暁男おおがうち ありき

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋一丁目五

電話 〇三・六五・四二二
振替 東京六三六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

序

歴史上、経済発展が変革の節を迎える都度、その変革を推進する個別経済主体がとった行動は、社会的に大きな意味を帯びた。産業革命期のイギリスは、まさにそうした時代であった。では産業革命の担い手となった個々の企業者は、自分が活動する経営環境の状況をどのように判断し、自分の経営行動のためにどのような問題をそこに知覚したのか。彼はそこで何を解決しようとし、どのような解決方法を考え、如何に試行錯誤をしたのか。そしてその結果として、彼の経営行動は、経営環境の客観的諸条件に対して、どのような影響を与えることになったのか。企業経営行動を、企業者のかかる主体的な活動と客観的な経営条件とが織りなす、言わば相関の軌跡としてとらえ、企業者活動を中心に据えてイギリス産業革命史を見ることが、そこに本書の関心の一つの焦点がある。

もとより、産業革命の過程で個々の企業者が取り組んだ問題自身は、経済史学の研究が指摘しているように、多くの場合、社会的に準備されていたものではあろう。けれども、その問題の解決の仕方が、社会的客観的に与えられていたわけではなかった。解決方法は、それぞれの企業者が、自分の置かれていた経営条件のもとで、独自に創出したものなのであって、まさに企業者の主体性のうちにあるものに他ならない。そして企業者のこうした主体的対応の過程を明らかにしてこそ、産業革命という歴史過程における個と全、主観と客観との整合的な理解が可能となるであろう。

序

本書の第一部は、産業革命期イギリスの企業者たちが、自己の置かれた経営環境の状況をどのように判断し、自分

自身の進路を定めたのか、個々の企業者の立場にできる限り接近して、その主体性の実現過程を明らかにしつつ、工業的経営条件を克服して工場制度が形成される経緯を追究したものである。ところで、工場制生産体制の実現は、企業者のもとへの膨大な資本の集積を伴ったが、ことにその技術的特徴として、経営内における固定資本の量が急増を見た。この事実は、企業者にとって、手工業段階とは異なった資本調達および会計の問題を引き起こさずには止まないものであった。そこで、工場制度の創出に進んだ企業者が、この固定資本に係わる問題をどのように認識し、解決したのか、その実態の追究を試みたものが、第二部の四つの章である。

さきに公刊した拙著『近代イギリス経済史研究』（岩波書店）が産業革命を展望したのに対して、本書は産業革命期そのものを研究の対象としており、その意味では本書は前著の続編をなしている。しかし、此の度は、研究方法において、主として経営史の手法と対象とを選んでおり、その点から言うところ、単なる続編であるよりも、むしろ新たな方向を目指す研究である。

本書の各章は、それぞれ同名またはほぼ同名の表題をもって、次のように発表した論文が母体となっている。すなわち、第一部第一章、第三章、第二部第二章、第四章および付録は、『立教経済学研究』一五巻三号から二四巻一号にわたって、折々に掲載した。第一部第二章は逆井孝仁ほか編『日本資本主義―展開と論理』（東京大学出版会刊）に、第四章は高橋幸八郎ほか編『市民社会の構造』（有斐閣刊）に、第二部第一章は『経済学論集』四三巻四号、第三章は『経営史学』一卷二号に、それぞれ掲載した。これらの論文は、独立論文として発表されたため、内容の重複を含むものがあり、また、発表してのち日を経て、意に満たなくなったものもあるので、部分的にはかなりの改稿を行ない、原形のままのものはない。

なお、第一部第一章、第二章、および第二部第四章は、いずれもマシュー・ポウルトンに係わりのある研究だが、

これは筆者が立教大学勤務当時に、同学在外研究員としてイギリスに派遣された折、バーミンガムを訪れて蒐集した資料にもとづいた、分析成果である。バーミンガム市民図書館で、かのボウルトン・ウォット文書を蔵する書庫に案内され、ボウルトン・ウォット商会の営業文書に直に手を触れた時の興奮は、未だに忘れ得ないが、そこで限られた時間をあげて原史料と取り組み、碩学ロウル以後は誰も見ていないという文書の束を文字通り繙いた。右の三章はその果実であって、新たに発掘した文書も少なからず用いている。

バーミンガムで暮した僅かのあいだに私が受けた深い印象の一つは、マシュー・ボウルトンがいまなお多くの人々から敬愛されているということであった。ボウルトンがこの町で活躍したかの産業革命期から、すでに二世紀を経た現在、しかもイングランド第二の人口を擁するこの大都会で、ボウルトンが人々の心に生き続けているというのは、いったいどういうことなのか。とまれ、そうした雰囲気をもって、勤労感をただよわせているこの町で、ボウルトンの書簡や覚書をはじめさまざまな文書を読み進んだことが、人間ボウルトンに対していっそうの興味を覚えるに至った一因であった。

研究成果をここにまとめるに当って、ボウルトンに触れる在外研究の機会を与えられた立教大学、とくに経済学部
の旧同僚に感謝したい。また、この研究を、さきの著書に続いて、同じ岩波書店から上梓できることは、著者として
幸せに思う。

昭和五三年六月

大河内 暁男

目次

序

第一部 産業革命の経営構想	一
---------------	---

第一章 イギリス産業革命期の経営構想	三
--------------------	---

——マシユー・ボウルトンの場合——

第一節 産業革命と企業者の経営構想	三
-------------------	---

第二節 マシユー・ボウルトンの大量生産構想とボウルトン・フオザギル	七
-----------------------------------	---

商会の経営	七
-------	---

第三節 市場開拓活動とジェイムズ・キアの貢献	二七
------------------------	----

第四節 ボウルトンの蒸気機関製造構想とボウルトン・ウォット商会	三三
---------------------------------	----

第五節 企業者ボウルトンの経営構想力	五〇
--------------------	----

第二章 アルビュアン製粉所	六九
---------------	----

——先駆的な蒸気力工場の経営構想——

第一節	蒸氣動力工場熱	六
第二節	アルビュアン製粉所企画	七
第三節	アルビュアン製粉所の操業と経営成果	八〇
第三章	ウィルトシア毛織物工業における工場制経営の成立	九〇
	——クラーク商会の場合——	
第一節	ウィルトシアにおける産業革命の模倣	九〇
第二節	クラーク商会の経営形態	九四
第三節	工場制度への経営転換	一〇一
第四章	社会的分業の状況から見たバーミンガム地域の産業革命	一三〇
第一節	産業革命期バーミンガム地域における経営特化	一三〇
第二節	機械化の進展	一四四
第二部	産業革命期の固定資本問題	一四五
第一章	産業革命期の長期工業金融	一四七
第一節	産業革命と固定資本	一四七

第二節	固定資本形成の経路	一五
第二章	工鉱業における作業場貸借制の展開とその意義	一六
第一節	作業場貸借制の起源とその初期的特徴	一七
第二節	絶対王制期における作業場貸借制の変容と限界	一八
第三節	一八世紀における作業場貸借制の展開とその特徴	一九
第四節	作業場貸借経営の企業者的判断	二〇
第三章	産業革命期の工業経営における固定資本概念	二〇
第一節	研究史上の固定資本認識	二一
第二節	固定資本概念の形成過程	二二
第四章	工場制企業における減価償却の成立過程	二三
	——ポウルトン・ウオット商会の事例——	
第一節	減価償却の先駆者としてのポウルトン・ウオット商会	二四
第二節	減価償却認識の形成過程	二五
付録	ポウルトン・ウオット文書について	二六

文獻目錄	6
索引	1

第一部 産業革命の経営構想

第一章 イギリス産業革命期の経営構想

——マシュ・ボウルトンの場合——

第一節 産業革命と企業者の経営構想

一八世紀後半のイギリス産業界は、従来のマニファクチャー期までの歴史においてはまったく存在しなかったような、さまざまな新技術や新種産業を矢継ぎ早に登場せしめて、いわゆる産業革命を遂行することになった。しかも、イギリスの産業革命は、世界史上で最初の産業革命であったので、ここに登場してくる新種の技術なり産業なりを社会的に受け入れるにあたって、その受け入れ方や影響については、誰にも予備知識や経験は存在しなかった。

こうした状況のなかで、当時の企業者たちは、自分の経営条件をどのように判断し、いかなる理由から、またいかなる見通しのもとに、工場制度の創出という革新的経営行動に突進していったのであろうか。革新の遂行者たる企業者の立場から見て、産業革命はいったいどのような構図のもとに推し進められたのか、この点が以下の分析の中心の関心である。ところで、経営史の観点から、この時期に新技術や新種産業がイギリスの産業界に定着してゆく過程を見るならば、それは、常識的に想像されているごとく単純明快に、一路近代の工場制経営の展開を目指す企業者によって率いられた、というものではなかった。その過程は、むしろ反対に、個々の企業者たちの各人各様の暗中摸索と試行錯誤の連続の歴史であったと言う方が、実態に近いように思われる。⁽¹⁾ もっとも、試行錯誤とは言っても、闇雲に

試行を重ねていただけではない。企業者それぞれは自分の経営事情を熟慮のうえで、新たな経営行動を起こしているのだが、ただその行先が、工場制生産体制という客観的な目標として、誰にでも明示され、また認識されているという状態には至っておらず、多方向に模索が行なわれていたのである。

一八世紀後半に至って、新技術や新種産業がにわかに続出した背景は、これまでの経済史研究の成果から約言すれば、以下のようなものであった。すなわち、一八世紀前半までのマニユファクチャー期における企業活動は、結合経営形態のマニユファクチャーの成長や工業企業による地方銀行の設立などに象徴されているように、ほぼ一七三〇年代ころには、マニユファクチャーとして、技術的に成熟の極限状態にまで到達していた⁽²⁾。しかも同時に、このころともなると、市場構造は全国的な規模で単一性を備えた国内市場の出現を迎えている⁽³⁾。そればかりではない。イギリスの産業構造全体として見ると、マニユファクチャー技術ではどうしても打開できない生産上のさまざまな隘路、たとえば繊維工業における周知の糸不足問題、金属工業における鉄不足問題、さらには輸送手段の不足問題といったような、構造的隘路があちこちに目立ち始めている。一七三〇年代以降の数十年間は、こうしたマニユファクチャー技術の爛熟期であるとともに、問題解決に向かう技術が生まれ出るための醗酵期とも言うべき時期であって、この醗酵を経た一七六〇年代に至ると、マニユファクチャーを止揚するような新技術や新種産業が、社会的大量現象として、一斉開花したのであった、と。

ところで、右の点をもう少し詳しく見るならば、一七三〇年代ころから、企業活動の一つの特徴的傾向として、マニユファクチャー経営主はもろろんのこと、独立経営者たらんことを目指す職人たちも、各人各様にさまざまな生産技術を工夫し、開発し、改良し、そうした新工夫新技術を基礎に、各人それぞれの方向を目指して、自らの経営活動を展開しようとする傾向、そうした活動を志向する風潮が、目立つようになった⁽⁴⁾、と言って差支えない。こうした傾

向そのものは、一面において、いわゆる社会的対流現象とあいまって、生産者にとって企業機会が広範に存在したことを示すものであり、来たるべき産業革命期に革新的技術が続出するための社会的基礎を形成するものであった。だがそれとともに、他面において、こうした現象が意味するところは、当事者たる個々の企業者の立場からの観点として、次のようにも理解できるだろう。すなわち、自己の存立基盤たるマニファクチャーの技術がすでに極限にまで到達している状態のもとで、上向的發展を目指して、さらにより一層の企業活動を展開するためには、もはや従来の経験的技術や単なる改良程度の技術では目的達成に十分ではなく、なんらか一段の飛躍を求めざるを得ないことが、広く社会的に知覚されており、かつ一部の人々はその知覚を意識にまで高めて、具体的な行動をとり始めていたということが、ここに示されているのである。それは、経験的企業経営行動からの脱出が意識されたことを意味している。けれども、マニファクチャー期の経営条件を克服しなければならないということが企業者のあいだに共通の認識として存在するとしても、それではこの新たな要請と企業機会とにどのように対応すべきか、如何なる途を企業者は選択すべきか、それは未知のことであった。人々の判断や行動は、たとえばジョン・ワイアト⁽⁵⁾のように、またジョサイア・タッカーのように、新生産技術たる機械の生産力と経済的効果とを認識して、工場制生産という方向に照準を定めた者もあれば、ジョサイア・ウエジウッドのごとく革新的販売方法を開発する者もあり、ある者はひたすら大規模生産を追求するかとみれば、他のある者は自分の得手とする技術領域に深く切り込んで極度の専門化を求める、という工合であって、選択の方向は多様をきわめていたのである。如何なる方向に目標を定めて現マニファクチャー体制から脱出するのかということになると、現状認識から企業活動の将来を構想する企業者たちは、各人各様に暗模索していたのであって、誰もがはじめから工場という技術と経営形態を構想していたとは、とうてい言い難い。しかしこの多方向の模索のなかで、一部の者が機械や動力を用いた工場制生産を実現しようと努めたことも事実で

あり、その努力こそが、実は、工場制度を実現してマニユファクチャー体制を克服する突破口をなすものであったし、またそれ以外には、工場制度実現の途はなかった。そうした企業者の経営行動と、彼をかく導いた経営構想こそが、工場制度を創出する牽引力だったのである。

ところで、一八世紀後半に入つて、さまざまの新技术や新種産業があい次いで出現し始めた時、すでに形成されていた国内市場の単一性は、これら革新の影響を単に局地内に留めてはおかなかった。その影響は直接間接にイギリス産業界全般に及ぶものとなり、またその波及の速度も従来とはくらべものにならない急速なものとなった。そこで企業者たちは、このような急速な、多方面における、しかも指向方向が確定的ではないさまざまな革新の出現という新事態の発生に対して、これを敏感に知覚し、対応しつつ、そのなかで、自らの経営の進展方向を機敏に構想してゆくことを迫られる。かかる事態は、マニユファクチャー期までの企業者⁽⁶⁾にあっては、かつて直面したことのない経営環境であり、また、かかる企業者性⁽⁶⁾能はこれまで要求されたことがなかった、と言って差支えあるまい。

まさにそうであるからこそ、この新事態において、さまざまな可能性のなかから企業経営行動の将来を構想する企業者の活動と能力とが、にわかに重視され始め、企業者活動が歴史の前面に躍り出てくるのである。そこで以下では、イギリス産業革命期の代表的な企業者の一人とされているマシュー・ボウルトン⁽⁷⁾をとりあげて、彼が一介の装身金具製造業者から身を起こして、イギリス随一の蒸気機関製造企業を展開してゆく過程を、分析することにした。その場合、可能な限りボウルトンの立場と経営環境とにたち帰って、彼が経営環境の状況をどのようにに判断し、如何なる経営の理念なり目標なりのもとに経営構想を練り上げたのか、そして、その経営構想と現実の企業活動とはどのような関係にあったのか、この点を中心に企業者ボウルトンの軌跡を辿り、もって、工場制生産体制を創出してゆく企業者活動の実態を、浮き彫りにしてみようと思う。

第二節 マシュー・ボウルトンの大量生産構想とボウルトン

フォザギル商会の経営

一

マシュー・ボウルトン Matthew Boulton (一七二八—一八〇九) が金属製バックル製造業で収めた成功を基礎に、バーミンガムの西郊ソホウに、彼の企業者としての名を高からしめるのに一役買うことにもなった、かの三階建の大作業場、いわゆるソホウ製造所 Soho Manufactory の建設を開始したのは、一七六一年のことであった。マシューの父はバーミンガム市中のスノウ・ヒルでバックル製造業を営んでいたが、その父のもとでマシューは一七歳のときから実地教育を受け、二一歳になると、父の事業の共同経営者としてバックル業界に登場した。そしてその後一〇年を経て、一七五九年に父を失ったところには、彼は自分の企業をバーミンガム地域の同業者のなかで指導的な地位にまで育てあげていた。⁽⁷⁾ このことは、たとえばバックル製造が時流に乗った業種であったとは言っても、ボウルトンが敏腕の企業者に違いなかったことを十分に示している。

ところで、当時のバーミンガムの製造業者にとっては、企業経営上、集中作業場において、多数の労働者を分業にもとづく協業体制に編制した、いわゆるマニュファクチャー形態が、小工業形態よりもはるかに有利であることは、言わば周知の事実であった。数十人の労働者を一作業場に集めて、大々的な分業にもとづく協業体制をもった金属工業マニュファクチャーが、この地域ではごく普通の経営形態であったし、時にその協業規模は数百人にも達していた